

平成 30 年 5 月 25 日現在

機関番号：12501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K17338

研究課題名(和文) 解放と教育・再考 新たなクリティカル・ペダゴジーの構築

研究課題名(英文) Rethinking Emancipation and Education: Reconstructing Critical Pedagogy

研究代表者

市川 秀之 (Ichikawa, Hideyuki)

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：70733228

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、クリティカル・ペダゴジーにおける解放と教育の関係を編み直すことを目的に遂行された。抑圧状況からの解放を志向するクリティカル・ペダゴジーには、教育行為が教育者によるビジョンの押し付けという批判が寄せられてきた。本研究では、クリティカル・ペダゴジーにおける教育行為が絶対的な土台なき基礎付けとして解釈できること、さらには学習者の能動的な作為の能力であるエイジェンシーを抑圧するものではないことを、ポスト基礎づけ主義や教育の美的側面等の探究によって示した。

研究成果の概要(英文)： This study aims to rethink the relationship between emancipation and education. Critical pedagogy, whose aim is to emancipate people from oppressive situations, has been criticized for educators' imposing visions on learners. To respond to this criticism, this study explores post-foundationalism, the aesthetic dimension in education, and so on. The results are that the act of education in critical pedagogy can be understood as the act of making foundations without the final ground, and that critical pedagogy does not suppress learners' agency.

研究分野：教育哲学

キーワード：クリティカル・ペダゴジー 解放 美的なもの ジャック・ランシエール 知性の平等 ポスト基礎づけ主義

1. 研究開始当初の背景

本研究開始当初の背景に存在していたのは、ヘンリー・ジルーに代表されるクリティカル・ペダゴジーの理論に対する批判に、どのように応答できるのかという問題関心であった。クリティカル・ペダゴジーとは、1980年代にアメリカで生まれた、人種差別や性差別からの解放及び民主主義社会の維持・発展を目指す教育理論である。この理論は、労働者階級のみならず、新しい社会運動の登場以降に取り上げられる多様な集団の解放につながる理論として機能してきた。

クリティカル・ペダゴジーにおける解放と教育の関係には、フェミニスト・ペダゴジーの論者を中心に、1980年代から批判が投げかけられてきた。例えばエリザベス・エルスワースは、クリティカル・ペダゴジーが解放の名の下に特定の規範を学習者に押しつけていると批判している (Elizabeth Ellsworth (1989) "Why Doesn't This Feel Empowering?: Working Through the Repressive Myth of Critical Pedagogy," *Harvard Educational Review* 59 (3), pp. 297-324)。

押しつけという批判の系譜で近年盛んに取り上げられているのが、ガート・ビースタによるものである。ビースタによれば、従来のクリティカル・ペダゴジーに代表される解放の捉え方は、知識人としての教育者(解放する者)と学習者(解放される者)を分離し、前者への後者の従属をつくり出している。(Gert Biesta (2010) "A New Logic of Emancipation: The Methodology of Jacques Rancière," *Educational Theory* 60 (1), pp. 39-59)。

ビースタのような批判をする論者は、ジャック・ランシエールの論を下敷きとしている。ランシエールは、人種差別や性差別の解消ではなく、知性の平等という原則に基づき、各人が自らの知性によって思考や発話することが解放であるとする (Jacques Rancière (1987) *Le Maître ignorant : Cinq leçons sur l'émancipation intellectuelle*. Paris: Fayard = (2011) 『無知な教師 知性の解放について』梶田裕・堀容子訳、法政大学出版局)。ランシエールの論を土台とするビースタにとって、各人が知性を行使できるようにすることこそが、教育による解放となる。

こうした解放と教育の捉え方は、各人が有する能動的な作為の能力であるエイジェンシーを担保し、教育者による介入を従属に変換しない点において、クリティカル・ペダゴジーの抱える課題を解決するための重要な手がかりとなっている。とはいえ、ビースタの論は、個人による知性の使用と抑圧状況への異議申し立ての間をどのように架橋できるのかについて、詳細に考察しているとは言い難い。知性の平等による解放は、どのような方向にも流れうるため、特定の規範に基づく社会づくりを志向するクリティカル・ペダゴジーとは、依然として距離がある。この距離を埋め

る理論を構築することが、本研究の課題であった。

2. 研究の目的

上記の背景から導き出された本研究の目的は、解放と教育の関係を再考することで、エイジェンシーを担保する一方で特定の規範の提示を可能とする、新たなクリティカル・ペダゴジーの理論を打ち立てることであった。この目的は、クリティカル・ペダゴジーが依拠するラディカル・デモクラシー論から見ても、決して不自然な課題ではない。ラディカル・デモクラシーの主唱者であるエルネスト・ラクラウは、ランシエールと自身の立場が近似していると指摘する (Ernesto Laclau (2005) *On Populist Reason*. London and New York: Verso)。この近似性を踏まえ、クリティカル・ペダゴジーの中に、知性の平等=学習者の尊重のモメントを看取することは不可能ではないと想定した。

3. 研究の方法

本研究は、平成27年度より3年間にわたって遂行された。その際の方法は、大きく分けて三つであった。なお、これらはいずれも文献研究によって進められた。

解放と教育についての見取り図の作成

まず、スコット・フレッチャーの著作 (Scott Fletcher (2000) *Education and Emancipation: Theory and Practice in a New Constellation*. New York: Teachers College Press) を参照に、解放と教育におけるクリティカル・ペダゴジーの位置づけを明らかにすることを試みた。次に、ジルーらの論の問題点を探究すべく、ビースタおよびランシエールの論を検討し、教育行為による従属という問題を抽出しようと考えた。

教育行為の押し付けからの分離

クリティカル・ペダゴジーにおける規範がどのように定立され、どのように提示されるのかを中心的に探究することで、教える行為が押し付けではないことを明示できると考えた。さらに、オリバー・マーチャルトの著作 (Oliver Marchart (2007) *Post-Foundational Political Thought: Political Difference in Nancy, Lefort, Badiou, and Laclau*. Edinburgh: Edinburgh University Press) 等を参照に、クリティカル・ペダゴジーをポスト基礎付け主義の教育理論として解釈することにより、基礎付け作業としての教育が必須であることを改めて示すことができるのではないかと考えた。

教育の美的側面の探究

不可避である規範の提示をエイジェンシーの担保と両立させることで解放と教育の関係

を描き出すことができると考えた。具体的には、アートを用いたクリティカル・ペダゴジー実践についての文献（例えば、Marit Dewhurst (2013) “Narrowing in on the Answers: Dissecting Social Justice Art Education,” in Mary Stone Hanley, George W. Nobit, Glinda, L. Sheppard, and Tom Barone, eds., *Culturally Relevant Arts Education for Social Justice: A Way out of No Way*. London and New York: Routledge, pp. 143-153）さらにはタイソン・ルイスの著作（Tyson Lewis (2012). *The Aesthetics of Education: Theatre, Curiosity, and Politics of Jacques Rancière and Paulo Freire*. New York: Bloomsbury）を参照に、教育に含まれる美的側面を抽出することで、教えることの確実性を破壊し、教育者と学習者の関係を流動化することで、エイジェンシーを担保するための理路を切り拓くことができるのではないかと考えた。

4. 研究成果

ポスト基礎付け主義的教育理論としてのクリティカル・ペダゴジー

フレッチャーの著作の検討から、クリティカル・ペダゴジーは、多様な集団の特定の問題関心から出発しつつ、それらを普遍化するような性質を持っていることが明らかとなった。この性質はとりもなおさず、基礎付けが不可欠な営みとしてクリティカル・ペダゴジーに宿っていることを意味している。

もちろん、ポストモダニズムを受容したクリティカル・ペダゴジーは、単純な基礎付け主義を拒絶する。その一方で、理性や啓蒙という概念を再構成して基礎付けに用いるべきだと考えている（Henry A. Giroux (1992) *Border Crossings: Cultural Workers and the Politics of Education*. New York and London: Routledge）。これは、最終的な土台の欠如を認識しつつも、なお規範による基礎付けを捨てないという点において、マーシャルトの言うポスト基礎付け主義に属する考え方である。

ポスト基礎付け主義の観点からクリティカル・ペダゴジーを捉えた際に課題となるのは、基礎付け行為をどのように描き出すのかである。ピースタやランシエールの著作が明らかにしているように、従来のクリティカル・ペダゴジーの教育関係では、教育者の知性が優先され、それに基づく規範を学習者は身につけるよう誘導される可能性を温存させていることも、また事実である。とはいえ、マーシャルトが指摘するように、ランシエールは知性の平等による解放さえ成し遂げることができれば、常に望ましい結果が訪れるという想定を暗に有している（Marchart, *Post-Foundational Political Thought*）。そのため、ランシエールの影響下にある教育理論を全面的に採用してしまうと、クリティカル・ペダゴジーは抑圧状況を批判し、新たな社会を構築するための望ましさの根拠を、教

育行為に含めることが難しくなってしまう。以上のような形で、ピースタやランシエールの言う意味での解放を促すはたらきかけこそが、押し付けではない基礎付けとしての教育であると見なすことはできず、異なった基礎付けの方法を明示する必要があることが分かった。

信仰・戦略・希望

クリティカル・ペダゴジーの教育行為を押し付けから分離し、最終的な土台なき基礎付けの営みとして捉えるために、ジルーの論を中心に検討した。まず、ジェイコブ・ニューマンの著作を参照に、最終的な土台に依拠せず規範を定立する行為を信仰として捉えた（Jacob W. Neumann (2011) “Critical Pedagogy and Faith,” *Educational Theory* 61 (5), pp. 601-619）。すなわち、クリティカル・ペダゴジーの教育者が特定の規範を正当なものとして定立する際には、様々な伝統を参照にするものの、最終的には自分がそのように信じているからという理由に基づくことを明らかにした。

次に、そのように定立した規範をどのように広めるのかについては、クリティカル・ペダゴジーが依拠するラディカル・デモクラシー論における戦略に着目して解明した。クリティカル・ペダゴジーでは、ヘゲモニー、すなわちある集団の考えを広げ、人々から同意を調達する営みを教育と同一視しているが、この同意の調達は二つの戦略によって遂行される。それらは、対抗戦略 既存の社会的・政治的秩序の否定を役割として有する と、新秩序構築のための戦略 社会組織の再構築を役割として有する である。クリティカル・ペダゴジーの実践の際、教育者は学習者の経験の共同での吟味を通して得られた知見を、対抗戦略に基づいて抑圧として名指す。次に、新秩序構築のための戦略に基づき、具体的な活動の構想と実行の過程で各人がエイジェンシーを行使し、自由と平等を享受できる民主主義社会を構築すべきという規範を学習者に受け入れてもらう。

以上のように、ヘゲモニーの行使としての教育は、信仰が支える規範をもとに練り上げられた戦略により抑圧を否定し、それを支える規範を棄却する。そして、否定したものを除く特定の枠内であれば何でもありという設定を用意し、それに学習者を引き入れる。

『希望の教育学』という著作を残したパウロ・フレイレを継承するクリティカル・ペダゴジーは、この引き入れの際に希望を掲げる。希望は、人々をデモクラシーへと動員し、その基礎上で抑圧状況への抵抗を動員するための媒介をその役割とする。これにより教育者は、ポスト基礎づけ主義とデモクラシーを結

びつけつつ、暫定的な基盤としてのデモクラシーによって抑圧状況に抵抗する人間を育成する。

以上から導き出されたのは、クリティカル・ペダゴジーの教育行為は、規範の定立と提示の双方の不確実性をあらわにし、基礎の可変性を担保している点において、ポスト基礎付け主義的であるということ、さらに特定の規範の固着に関して暫定性を担保し、常に開かれた状態にすることを徹底しているという点において、押し付けとは異なるはたらきかけであるということであった。

教育の美的側面

もちろん、以上の教育についての見方は、特定の規範を提示し、人々をその方向へと導くという点では、ピースタらの批判が妥当となる余地を残している。そこで、エイジェンシーの担保を以て得られた知見に十分に織り込むべく、教育の美的側面に着目した。

これまでのクリティカル・ペダゴジーでは、美に関する話題はアート教育実践が中心に扱ってきた。これを検討した結果、アートはヘゲモニー闘争に巻き込む際に理性的な語り以外の表現を位置づけるよう、クリティカル・ペダゴジーの理論に要請するものとして扱われてきたことが明らかになった。

しかし、クリティカル・ペダゴジーにおいて、美は以上のような扱いにとどまるものではないことが、研究を進めるうちに明らかになった。ルイスの著作 *The Aesthetics of Education* 等の検討によって判明したのは、教育するという行為そのものに美的側面が内在し、それがエイジェンシーの担保を可能としているということであった。すなわち、信仰と戦略に基づき、希望を掲げてヘゲモニーを行使するというポスト基礎付け主義的な教育の見方は、その行為に潜む美的側面によってエイジェンシーを担保しているということであった。

まず、ランシエールによる感性的なものの分割 = 共有という概念を手がかりにすると、政治という営みには人々の感覚が密接に関わっていること、さらには教育にもこの感性的なものの分割 = 共有が存在することが明らかになった。さらに、教育の美的側面には、美と崇高という二つの要素が存在することが分かった。美は人々の思考や行動を支える感性的なものを指し、崇高は美では捉えきれない、異なった感性的なものを作りだすための可能性の総体を指す。この崇高は潜勢力として美に付随しており、教育者と学習者の関係が揺らぎ、知性の平等が顔を出す瞬間に感得される。

これらを踏まえ、以下のことを導き出した。クリティカル・ペダゴジーにおける教育は、美を軸とするはたらきかけによって既存の感性的なものの再構築を図ることで、民主的社會をつくりだそうとする。その一方で、別様

の感性的なものを作りだしうる潜勢力としての崇高がこのはたらきかけに常に伏在しているため、教育者が学習者によって反駁される可能性は常にある。美に内在する崇高は、教育者と学習者の関係が知性の平等によって流動化される際に顔を出し、教育者の提示するものとは異なった感性的なものや、それに基づく規範を紡ぎ出す契機としての役割を果たす。

以上の結果を踏まえると、教育の美的側面への着目は、ポスト基礎付け主義的に解釈されたクリティカル・ペダゴジーにおける解放、すなわち信仰・戦略・希望によって押し付けとは異なったものとされる規範の提示という枠内で、ピースタが強調していた知性の平等に基づく解放を捉えることを可能にする。すなわち、クリティカル・ペダゴジーにおける規範の提示は、崇高を通じたエイジェンシーの発現によって教育者の立場およびその規範の正当性が揺さぶられているため、常に暫定性を帯びている。また、提示される規範の内実も可变的である。これは、反人種差別主義や反性差別主義といったものだけではなく、デモクラシーという規範にも当てはまる。最終的な土台が存在しない状態でもなお、抑圧状況からの解放と民主的社會の発展を目指すのであれば、クリティカル・ペダゴジーは、以上のことを論の内に組み込んで展開されねばならないのである。

道徳教育

～ についての研究を進める中で得られた知見（とりわけ、政治学関連の著作から得られたもの）を用いて、道徳教育、とりわけ道徳授業の研究を行った。具体的には、対話 / 熟議を軸とした道徳授業を開発した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

市川秀之、「クリティカル・ペダゴジーにおける規範」、『日本デューイ学会紀要』、第57号、査読有、2016年、43 - 52頁。

市川秀之、「熟議民主主義が道徳授業にもたらすもの 問題解決的な学習に焦点を当てて」、『千葉大学教育学部研究紀要』、第64巻、査読無、2016年、64 - 85頁。

阿部学、市川秀之、土田雄一、藤川大祐、「熟議民主主義を背景とした道徳授業の教育方法についての検討 熟議シミュレーション授業の開発と実践を通して」、『授業実践開発研究』、第9巻、査読無、2016年、89 - 98頁。

市川秀之、「クリティカル・ペダゴジーにおけるアート」、『日本デューイ学会紀要』、第56号、査読有、2015年、1 - 10頁。

〔学会発表〕(計7件)

市川秀之、「クリティカル・ペダゴジーの美学」日本デュイ学会第61回研究大会、2017年9月18日、早稲田大学(東京都新宿区)。

市川秀之、「ポスト基礎付け主義的教育理論としてのクリティカル・ペダゴジー」、教育思想史学会第27回大会(コロキウム5「ポスト基礎付け主義と規範の行方 政治と教育から問いなおす」)、2017年9月10日、武庫川女子大学(兵庫県西宮市)。

市川秀之、阿部学、「熟議型道德授業の理論と実際」、日本道德教育学会第89回大会(課題研究)、2017年7月2日、千葉大学(千葉県千葉市)。

市川秀之、「クリティカル・ペダゴジーの希望論」、日本デュイ学会第60回研究大会、2016年9月17日、岐阜大学(岐阜県岐阜市)。

市川秀之、阿部学、土田雄一、「熟議型道德授業の開発と実践」、日本道德教育学会第87回大会、2016年7月3日、聖徳大学(千葉県松戸市)。

市川秀之、「熟議民主主義は道德授業に何をもたらすか」、日本道德教育学会第86回大会、2015年11月22日、岡山大学(岡山県岡山市)。

市川秀之、「クリティカル・ペダゴジーにおける規範」、日本デュイ学会第59回研究大会、2015年10月3日、明星大学(東京都日野市)。

〔図書〕(計1件)

市川秀之、「国際理解教育 異文化理解と地球的課題の解決を通じたグローバル・シティズンシップの育成」、千葉大学教育学部附属教員養成開発センター編、『新・教育の最新事情 教員免許状更新講習テキスト』、福村出版、2016年、189 - 208頁(総頁数: 231)。

〔その他〕

【翻訳】

ダグラス・ケルナー、ジェフ・シェア、「批判的メディア教育とラディカル・デモクラシー」(市川秀之訳)、マイケル・W・アップル、ウェイン・アウ、ルイ・アルマンド・ガンディン編、『批判的教育学事典』、明石書店、2017年、319 - 339頁(総頁数: 581)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

市川 秀之 (ICHIKAWA, Hideyuki)

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号: 70733228